

〈報告〉

中学校における体育の種目選択制に関する研究

—ダンス領域を中心とした現状と問題点—

中村 恭子*・浦井 孝夫**

Research on the selective system of physical education in junior high school
: The problems in the survey of dance domain

Kyoko NAKAMURA* and Takao URAI**

1. はじめに

平成10年度の中学校学習指導要領¹⁾³⁾⁴⁾の改定により各教科の配当時間が減少し、保健体育科では従来の年間105時間から90時間に縮小された。また、領域および種目の選択幅がますます拡大された。ダンス領域についてみると、第1学年では「武道」および「ダンス」のうちから一を選択して履修できるようにすること、第2・3学年では「球技」「武道」「ダンス」のうちから二を選択して履修できるようにすることとされた。また、従来の「創作ダンス」、「フォークダンス」に加えて新たに「現代的なリズムのダンス」が導入され、これらから運動を選択して履修できるようにすることとされた¹⁾³⁾⁴⁾⁸⁾⁹⁾。したがって、ダンスカリキュラムは学校により多様化することが予測される。先行研究²⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾では、10年前の調査研究や高等学校を対象とした調査はなされているが、中学校を対象とした調査は報告が見当たらず、その実態は明らかにされていない。また、種目数が増えてもダンスに充当できる時間数が減少することから、学習内容の充実は難しいことが予測される。

そこで、本研究では中学校の実態調査にもとづき、これらの改訂がダンス教育にどのような影響を及ぼしたかについて現状と問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

著者らが作成した平成15年度のダンス授業に関する質問紙を郵送法により配布、回収した。

対象は東京都の公立中学校651校の保健体育科教員各1名とした。(ただし、平成15年度にダンスを実施した学校はそのダンス担当教員、ダンスを実施しなかった学校は体育科主任教員に回答を依頼した。)回答数は307、有効回答数306、有効回答率47.0%であった。なお、部分的に未回答項目のあるものも有効回答としたため、調査項目により回答数は異なる。

調査期間は平成16年1月7日から1月31日であった。

3. 結果および考察

3.1 体育授業の実施状況

保健体育科の年間配当時間は約85%の学校が90時間であり、新指導要領の規定時間に従ってカリキュラムが組まれていることが確認された。3年間を通じての累計で領域選択制は44.2%の学校が、領域内種目選択制は51.6%の学校が実施して

* ダンス運動学研究室
Dance Movement

** 体育科教育学研究室
Sport Pedagogy

表1 体育の選択性実施状況

学 年	領域選択性実施校 (n=203)			領域内種目選択制 実施校 (n=281)		
	回答数	実施 校数	実施 率%	回答数	実施 校数	実施 率%
1年生	272	89	32.7	268	90	33.6
2年生	276	107	38.8	273	122	44.7
3年生	272	113	41.5	270	137	50.7
3年間累計	283	125	44.2	281	145	51.6

いた。選択性を実施している学校は約半数に留まっていることが確認された。なお、選択制の実施率は学年が進むにつれて高くなる傾向が見られた(表1)。

3.2 ダンス授業の実施状況

3.2.1 ダンス授業の実施率

ダンス授業を計画・実施していた学校は、有効回答306校中247校で実施率は80.7%であった。ダンス授業を実施していない学校は59校で19.3%であり、その理由は「他の領域が優先」58.9%、「体育時間の不足」41.1%、「ダンスを指導できる教員がない」35.7%などであった。この「ダンスを指導できる教員がない」と回答したのは94.7%が男性教員であった。(男性回答者の56.3%) そのほか、男性教員からは自由記述で「女性教員がないから」「男性にダンスの指導は難しい」という回答も寄せられた。保健体育科では女性教員の配置数が極めて少なく、ダンスの指導経験の乏しい男性教員の中には、教科配当時間減少を理由に指導する自信のないダンスを実施しないという傾向が認められた。

3.2.2 ダンス授業の必修・領域選択の別および男女の履修状況

ダンス実施校におけるダンス授業は3学年の合計で必修が87.3%、選択が12.7%であった。保健体育科の領域選択性実施率が37.7%であったのに比較して、ダンスは必修での実施率が高いといえる。また、クラス編成は女子クラスが88.1%、共習クラスが11.4%で、男子クラスは0.5% (1校) が実施していたのみであった。ダンス領域は男女

表2 ダンス授業クラスの必修・選択, 男女共習・別学

		共 習 クラス		女 子 クラス		男 子 クラス		合 計	
		n	%	n	%	n	%	n	%
必修	1年生	19	9.3	167	81.9	1	0.5	187	91.7
	2年生	12	5.4	177	79.4	1	0.4	190	85.2
	3年生	9	4.4	165	80.5	1	0.5	175	85.4
	3学年累計	40	6.3	509	80.5	3	0.5	552	87.3
選 択	1年生	6	2.9	11	5.4	0	0.0	17	8.3
	2年生	13	5.8	20	9.0	0	0.0	33	14.8
	3年生	13	6.3	17	8.3	0	0.0	30	14.6
	3学年累計	32	5.1	48	7.6	0	0.0	80	12.7
合 計		72	11.4	557	88.1	3	0.5	632	100.0

共修・武道との選択制が導入されて15年が経過するが、女子の必修としての実施が80.5%を占めており、男子のダンス履修率は非常に低いといえる(表2)。

また、領域選択制の場合、ダンスと組み合わせになっている他の領域は61.0%が武道で、次いで陸上運動が33.8%であった。従前の男子は武道、女子はダンスという組み合わせが踏襲されている傾向が認められた(表3)。

3.2.3 ダンスの年間配当時間および実施ダンス種目

各学年のダンスの年間配当時間は1年生9.7±3.4時間、2年生10.2±4.1時間、3年生10.0±5.8時間で、3学年の平均で10.0±4.5時間であった。3年間の累計では25.7±11.5時間で、これは保健体育科全体の配当時間の9.5%に相当する。実施ダンス種目数は各学年とも1.4±0.5~0.6種目で、68.8%の学校が1年間に1種目のみを扱っていることが明らかになった。3年間の累計でも1.7±0.8種目、42.6%の学校が1種目しか扱っていなかった。

一方、各ダンス種目の実施率および年間配当時間は3年間の累計で創作ダンス63.7%、19.4時間、現代的なリズムのダンス54.4%、14.3時間、フォークダンス24.1%、5.5時間、その他のダンス

表3 ダンス領域と組み合わせになっている領域

学 年	回答数	器械運動		陸上運動		水 泳		球 技		武 道	
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
1年生	41	6	14.6	14	34.1	0	0.0	2	4.9	26	63.4
2年生	47	7	14.9	15	31.9	0	0.0	6	12.8	28	59.6
3年生	48	6	12.5	17	35.4	0	0.0	7	14.6	29	60.4
3学年合計	136	19	14.0	46	33.8	0	0.0	15	11.0	83	61.0

表4 ダンス種目の実施率

学 年	回答数	創作ダンス		フォークダンス		現代的なリズムのダンス		その他のダンス	
		実施率%	配当時間	実施率%	配当時間	実施率%	配当時間	実施率%	配当時間
1年生	198	49.5	9.2	23.2	4.1	40.4	6.3	27.8	6.1
2年生	213	54.9	9.4	12.7	3.1	43.2	7.3	24.9	6.5
3年生	196	51.5	9.2	9.2	3.0	43.9	7.7	27.0	6.4
3年間累計	237	63.7	19.4	24.1	5.5	54.4	14.3	32.5	13.3

32.5%, 13.3時間であった。フォークダンスの実施率は低く、代わりに現代的なリズムのダンスの実施率が創作ダンスに次いで半数以上を占めていた。現在では、創作ダンスと現代的なリズムのダンスの2種目が主要なダンス種目といえる。すなわち、中学校のダンス領域では創作ダンスもしくは現代的なリズムのダンスの1種目を実施している学校が7割近くを占めると考えられる(表4)。

3.2.4 ダンス領域内種目選択制の実施状況

ダンスの領域内種目選択制の実施率は1年生11.4%, 2年生21.0%, 3年生28.7%と学年が進むにつれて高くなっていった。3年間の累計では33.0%の学校が実施していたが、67.0%の学校ではダンス種目を生徒が選択して履修することは全くできず、教師が採択していることが判明した(表5)。

3.3 ダンス授業に関する教員の意識調査

3.3.1 ダンスの領域内種目選択制に対する評価

領域内種目選択制に対しては「まあよい」41.3%, 「非常によい」14.8%で合計56.1%の教員が肯定評価していた。一方33.0%の教員は「どちらともいえない」の中立評価であり、11.0%の教員

表5 ダンス領域内の種目選択制実施率

学 年	回答数	実 施		非実施	
		n	%	n	%
1年生	193	22	11.4	171	88.6
2年生	211	44	21.0	166	79.1
3年生	192	55	28.7	137	71.4
3年間累計	233	78	33.0	155	67.0

が否定評価していた。肯定理由は「生徒の個性や主体性を尊重できる」40.6%, 「学校の実情に合わせやすい」39.8%, 「男女共修に対応しやすい」23.8%, 「時短の中で1種目をしっかり学習させられる」16.1%の順であった。否定理由は「選択履修は物理的に難しい」29.5%, 「系統だった学習ができない」13.8%や「中学生では全てを体験させるべき」13.0%などの順であった。

生徒の多様性や学校の実情に合わせやすいとして領域内種目選択制を支持する教員が過半数を占めていることとは裏腹に、実際の実施率は非常に低く、教員の配置や指導の都合から種目選択制の実施は物理的に難しいことが伺える。また、種目

選択性が生徒の学習成果に及ぼす影響については、生徒の主体性を尊重できるとする反面、中学生にはすべての種目を系統立てて学習させたいとする意見もあり、評価は賛否両論といえる。

3.3.2 現代的なリズムのダンスの導入に対する評価

現代的なリズムのダンスの導入に対しては「まあよい」55.3%、「非常によい」21.2%で、合計76.5%の教員が肯定評価しており、「どちらともいえない」の中立評価は20.5%、「よくない」と否定評価していた教員はごく僅かだった。肯定理由としては「生徒の興味・関心が高い」69.7%、「踊る楽しさを体験させやすい」63.3%、「生徒が主体的・積極的に取り組む」42.3%などであった。否定的理由としては「自分に指導経験がなく不安」16.1%、「生徒によって技能の差がやすい」12.4%などであった。

3.3.3 各ダンス種目の指導上の問題点

指導上の問題点としては、創作ダンスでは「生徒・グループにより能力や好みに差がある」47.2%、「生徒の興味・関心が低い」42.6%、「音楽の選曲が難しい」30.9%、「評価・評定が難しい」30.9%などの順であったほか、「創作に時間がかかる」「配当時間減少で扱いにくくなった」などの問題点が指摘された。フォークダンスでは「生徒の興味・関心が低い」51.4%、「評価・評定が難しい」37.8%、「創作技術の向上が期待できない」32.9%などの順であった。現代的なリズムのダンスでは「自分の実技力に不安がある」47.7%、「生徒・グループにより能力・好みに差がある」41.9%、「評価・評定が難しい」33.3%、「よい指導資料・ビデオ教材がない」29.5%などの順であったほか、「教材研究の機会が少ない」「指導法がわからない」などの問題点が指摘された。

従来からの創作ダンスやフォークダンスは「生徒の興味・関心が低い」ことが主な問題点であったのに対し、現代的なリズムのダンスは生徒の興味・関心は高いが「能力・好みに差がある」ことや、教員が「自分の実技力に不安がある」ことが問題としてあげられていた。生徒の多様性に対応できる教材研究や指導法研究の立ち遅れが伺える。

4. 結 論

以上から、中学校のダンス授業は学習指導要領の改定を受けて、①半数以上の学校で現代的なリズムのダンスが実施されるようになり、②種目数の増加と領域内種目選択制の結果、学校により実施種目が多様になった。しかし、③ダンス種目の特性や学習目標・学習内容に対する教員の認識は様々で、④領域内種目選択性は教員の採択に任せられ、生徒に選択権のない学校が多く、⑤配当時間が減少して実施可能な種目数が限定されているため、学習内容に偏りがでる恐れがある、などの影響と問題点が確認された。また、現代的なリズムのダンスは特性および学習目標・学習内容が明確でなく、教材研究および指導法研究の不足などが主な問題点であった。

これらから①各種目の特性および学習目標・学習内容の明確化、②教材研究および指導法の開発・改善などが課題として示唆された。

文 献

- 1) 松本富子 (1999) 表現運動・ダンスと学習指導。最新体育科教育法 杉山重利・園山和夫編著、東京、大修館書店、120-125
- 2) 松本富子、神戸円、国枝たか子 (1994) ダンス学習における選択性実施について—中学校・高校現職教員への全国調査から—、群馬大学教育学部紀要、芸術、技術、体育、生活科学編29、95-108
- 3) 文部省 (1998) 中学校学習指導要領、1-6、71-79、大蔵省印刷局、東京
- 4) 文部省 (1999) 中学校学習指導要領解説 保健体育編、62-70、東山書房
- 5) 中村恭子、武井正子、浦井孝夫 (2002) 高等学校におけるダンス授業のカリキュラムに関する研究。—実態調査をもとにして—、順天堂大学スポーツ健康科学研究 6、94-105
- 6) 中村恭子、浦井孝夫 (2003) ダンス教育の目標に関する研究—高等学校のダンス担当教員の評価にもとついて—、順天堂大学スポーツ健康科学研究 7、75-79
- 7) 佐分利育代、広兼志保 (1994) ダンス指導実践に

関わる現職教員の意識—中学校を対象として—, 鳥取大学教育学部研究報告, 教育科学36, 309-329

- 8) 高橋るみ子, 佐藤典子(2001) 創作ダンスの授業.
新学習指導要領による高等学校の体育の授業 東京, 大修館書店, 259-277
- 9) 牛山真貴子, 薬師寺貴花(2001) 現代的なリズム

のダンスの授業. 新学習指導要領による高等学校の体育の授業 東京, 大修館書店, 278-299

(平成16年10月8日 受付)
(平成16年11月30日 受理)